

懸賞論文(学生論文部門) 審査結果について

序

平成22年度は、「低炭素社会にふさわしいまちづくり」をテーマとして、昨年6月から「学生論文部門」の募集を開始(締め切り9月30日)し、大学院、大学、高専あわせて23編の応募をいただきました。今回は残念ながら、最優秀賞、優秀賞に該当する論文がなく、佳作のみ5編を選定しましたので、概要を紹介します。

1. 審査結果

- ・ 応募結果: 23編
 - ※分野別; 理工系16編、文系7編
 - ※学校別; 大学院10編、大学12編、高専1編
- ・ 審査結果
 - 最優秀賞: 該当者なし 優秀賞: 該当者なし
 - 佳 作: 5編

■佳作(アイウエオ順)

- ・ 大久保勇樹(日本大学)「太陽をデザインする ～建築・都市・国土への展開～」
- ・ 鎌田正篤(京都大学大学院)「熱を活用した低炭素型街づくり」
- ・ 鈴木亮平ほか(計9名)(東京大学大学院)「モバイル施設と小さな公共空間のネットワークによる持続性のあるまちづくり」
- ・ 日比野美香(群馬工業高等専門学校)「人と環境に優しい橋梁」
- ・ 山本泰弘(筑波大学大学院)「市民金融」で躍動するまちづくりを目指す」

2. 審査方法と受賞論文

昨年度のテーマは「みなさんはどのような街に住みたいですか」でしたが、今年度は喫緊の課題である地球環境問題に焦点をあわせ「低炭素社会にふさわしいまちづくり」としました。

論文の審査は、当協会の広報委員会委員(11名)が行いました。最初に審査基準をもとに各委員がそれぞれ全ての論文を評価し、全員の評価結果を集計・整理し、広報委員会での最終審査会を経て、表彰論文を決定しました。

応募校の内訳は、大学院5校*、大学8校*高専1校*でした。地域別で見ると、関東、新潟、愛知、京都、大阪、熊本から応募を頂きました。北海道、東北、中国、四国からの応募がないのが残念です。(※重複除く)

学科別で見ると理工系の方(16名)が最も多く、文系の方からは7名の応募を頂きました。

応募の動機については大学内掲示ポスター6名、先生

からの紹介4名、協会HP4名といったものでした。

選ばれた佳作5編についての講評は次のとおりです。

■佳作受賞論文

○大久保勇樹(日本大学理工学部社会交通工学科4年)

「太陽をデザインする ～建築・都市・国土への展開～」

大久保氏は、低炭素社会の実現に向けて現在進められている様々な分野、企業での取り組みが景観・環境破壊を生じ始めている現状を捉えています。また、今後の開発動向を念頭にインフラそのものに太陽光発電技術を取り込み、エネルギー生産拠点へ転換するアイデアも提案しています。ソーラーパーク、マスダール計画など、既に内外で唱えられているアイデアを単に紹介するだけでなく、国内における新規プロジェクトとして練り直し、コンセプトを具体的にグラフィックで示すなど、読者がイメージしやすい作品に仕上げています。特に大阪湾のマスダール計画は壮大であり、近未来のプロジェクトとして実現可能な若者らしい夢のあるアイデアです。

本作品で提案したアイデアがもたらすCO₂削減効果などについての研究を期待します。

○鎌田正篤(京都大学大学院地球環境学舎環境マネジメント専攻1年)

「熱を活用した低炭素型街づくり」

運輸部門に着目した応募論文が多かった中で、本作品は民生部門のエネルギー削減に言及している点で独自性を感じました。

鎌田氏は本テーマに対し、国内のCO₂排出構成及びその推移から削減余地の多い民生部門に着目し、特に消費エネルギーの大きい熱エネルギーの効率の活用が低炭素型街づくりの基本であると考えています。

熱エネルギーの効率的利用方法について「地域熱電供給」を軸に「断熱」「植物」「風」の直感的な4つの視点からとらえ、その利用環境における無駄の排除を基本に、自然との共生や配慮についても提案しており、それら提案相互の連携、関連付けを、独自の「三つの道」としてとりまとめているところが評価できます。

「三つの道」を既往の制度、手法と対比した上で、実現に向けた導入手法や経済的効果についての研究を期待します。

○鈴木亮平ほか(計9名)(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻ほか)

「モバイル施設と小さな公共空間のネットワークによる持続性のあるまちづくり」

本作品はコンパクトシティ論に一石を投げ、ソフト対策を重視とした対極的な視点で論理を展開しています。都市形態に手を加えることなく、その機能を住民ニーズに合わせて動かすという「都市機能のモバイル化」を図ることで人々の移動を最小限に抑えるという視点は他に類を見ない独創性を持っています。

今やお年寄りまでもが携帯電話を使う時代であり、こうした論理は決して夢物語ではなく現実的なものとして受け止めることができます。今後ますます少子高齢化が深刻になる地方都市は、決して寂れていくわけではなく、ちょっとした工夫次第で活気を取り戻すことが可能だというあり方を提案しています。今後の街づくりを考える上で重要な提案であり、非常に好感が持てました。

「たなカー」と「ぶらっと」の導入によるCO₂削減効果についての今後の検討や提案を期待します。

○日比野美香(群馬工業高等専門学校環境都市学科5年)

「人と環境に優しい橋梁」

低炭素社会にふさわしいまちづくりの1つの視点として、「橋梁」という私たちの生活に欠かせない土木構造物、なかでも「木橋」に着目した点が独創的です。また、低炭素社会実現に向けたまちづくりの1つの象徴として、

人と環境に優しく、あたたかみを感じられる木橋をとらえているところに共感しました。

定量的なデータを用いて主張の根拠を明確にしている点や自らの実体験を交えながら説得力を持たせている点などが評価できました。

コンクリート橋に比してコスト面や耐久性でどう評価できるのかといった点などについて、より具体的かつ現実的な提案を期待します。

○山本泰弘(筑波大学大学院人文社会科学系研究科)

「市民金融」で躍動するまちづくりを目指す

本作品は、低炭素社会実現に向けた「市民金融」のしくみを論じています。昨今の公共事業では、年々縮小される予算の中で一体どのような社会資本サービスができるのかといった議論が活発なだけに、こうした資金調達の切り口から提案するアイデアはPPP(官民連携)等を推進するためのヒントになり得ると感じました。「おひさまエネルギーファンド」や「市民風車事業」と言った具体的な事例を織り交ぜながら、地域の自立、連携、専門家の養成などの課題を掲げ、論拠を補強する努力も見られます。

今後は日本全国に展開できるような、より具体的な提案を期待します。

最後に、応募者の皆様には貴重な夏休み期間中ながら、論文執筆に注力を頂き、ここに厚くお礼申し上げます。

当協会では平成23年度も論文を募集する予定です。

力のある作品の応募をお待ちしています。奮って御参加ください。

(広報委員会)

